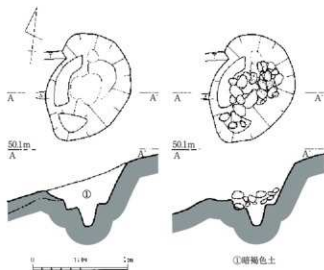


拳大から人頭大の山石が、長軸 117m、短軸 082m、深さ 047mの土坑の中に落ち込んでいる。この土坑は平面楕円形を呈し、地山を掘り込んで作られている。石材には重なった状況が認められ、本来は数段に亘って積まれたものと考えられる。中央部は木根によって攪乱されている。

埋土は、暗褐色土単層である。

出土遺物はなく、時期、性格とも不明である。(牧本)



第24図 集石遺構4

第3節 西斜面部の調査

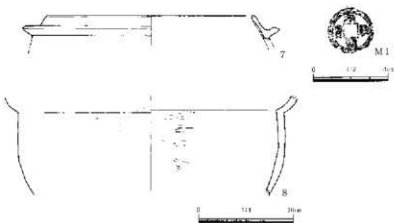
(1) 段状遺構

段状遺構3・4、土坑12(第242・243図、P L 60・70)

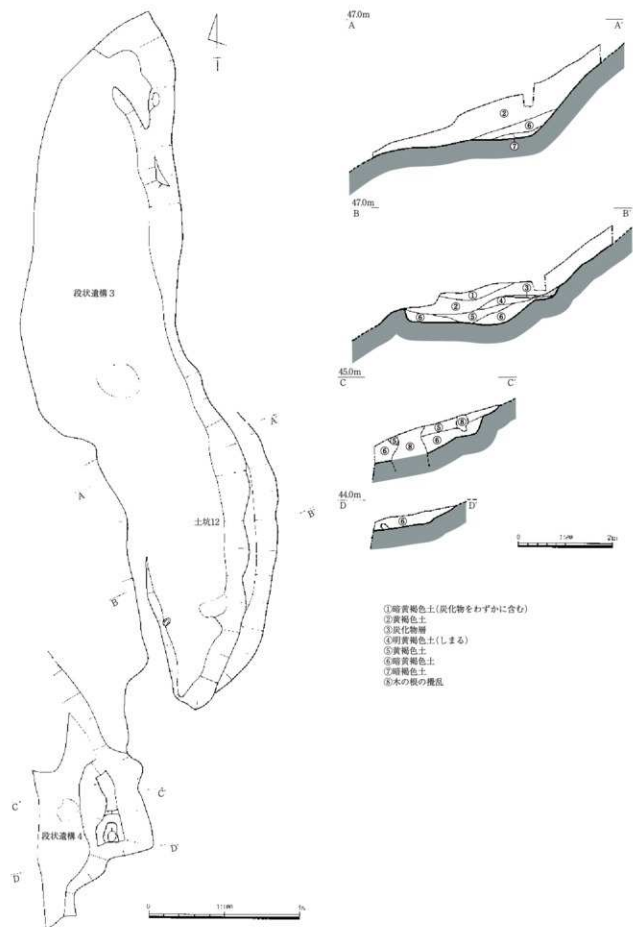
調査区西側、E7からG7グリッドにかけての標高43〜45mの丘陵斜面部に立地する。調査区から平坦面の存在が認められた場所である。

段状遺構3は、幅25〜38m、長さ175m以上を測る。丘陵斜面部をL字状に掘削して平坦面を作っている。北側は、近代の墓地 捨て墓 のために大きく掘削されており、遺存していない。西側は流失しており、正確な平坦面の幅は不明である。南側は、後世の製炭土坑12に掘り込まれている。

埋土は、3から6層に分層できたが純粋な埋土だけではない。埋土中で製炭土坑12が掘り込まれているが、明確な範囲は掘り飛ばしてしまい規模等は不明である。第4層上面が硬化しており底面をなしていたものと思われる。炭化材が幅17m、長さ37mに亘って出土している。



第24図 段状遺構3・4出土遺物



第24図 段状遺構3・4、土坑12

炭焼きの時期は不明であるが、丘陵上の炭焼き土坑と同時期のものと考えられる。

出土遺物には、埋土下層で土師器羽釜7、元祐通寶M1がある。

段状遺構4は、段状遺構3の南西側にあり、一段低い斜面部に位置する。土壘盛土を除去した後に検出されたものである。平坦面は不整形で、一部二段状を呈す。木の根による攪乱が著しい。

埋土は2層に分層できた。土壘盛土である砂質の層とは異なり、ローム層由来の黄褐色土系の土層で、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には、底面上での土師器鍋8がある。

段状遺構3・4とも、出土遺物から八峠中世 期、13～14世紀ごろのものと考えられ、土壘築造以前のものである。性格は不明である。(牧本)

第4節 東斜面部・丘陵裾部の調査

(1) 盛土遺構

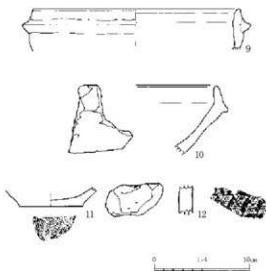
盛土遺構1(第244～247図、P L 61・62・70)

調査区東側のC3グリッドの斜面部にあり、標高390～417mからにかけて立地している。調査前は、見かけの幅約7m、長さ約9m、高さ約3mを測る天狗の鼻状に突出する地形があり、これを古墳状の隆起とみなして調査を行った。

この隆起はクロボクとロームの細かな互層によって造成され、古墳の版築を思わせるが、土の締まり具合からは、突き固めた様子は認められない。造成土の堆積は水平ではなく、もとの地形の傾斜と同様に、南西から北東に向かって傾斜している。もとの地形の高さを除く、造成に伴う隆起の高さは2mで、標高41m付近から、盛土を水平にしようとした様子がみられる。山裾側の造成は見かけよりも遠くまで及んでおり、門前上屋敷遺跡の造成土につながっていく。隆起の北西側から北東側にかけては、段状遺構1の造成に伴って手が入えられており、また、隆起の南東側は石組み遺構などの立地する平地部分の形成

に伴って、およそ16世紀ごろに切り崩しが行われたと考えられる。

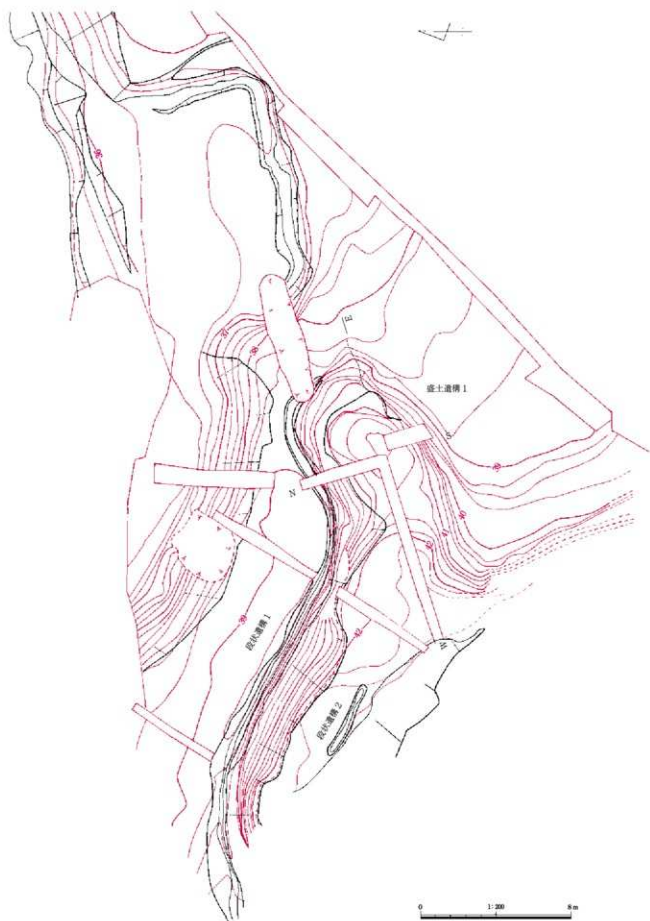
出土遺物には、図化したものに瓦質土器羽



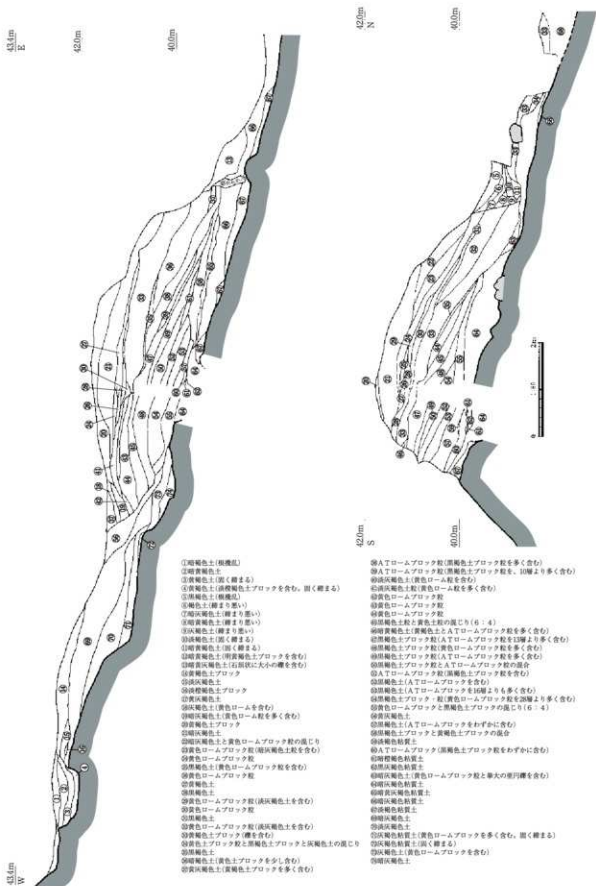
第244図 盛土遺構1出土遺物



第245図 盛土遺構1下層出土遺物



第 246 図 盛土遺構 1



第24図 盛土遺構1土層断面

釜9、備前焼燗鉢 10 土師器坏 11 火鉢 12がある。これらはおよそ 16世紀ごろのものと考えられる。いずれも表土付近の出土であり、必ずしも当遺構に伴うものとはいえない。

時期を推定するものとして、当遺構の下層で後述する鉄鍋を埋納した土坑 10がある。土坑 10は 14世紀ごろのものと考えられ、この時期以降に築造されていることは確かである。また、当遺構旧表に当たる遺物包含層からは、常滑焼 13 鉄滓 M 2 が出土しており正確な判断はできないが、14世紀ごろのものと考えられる。

この遺構が作られた目的については明らかではないが、地鎮遺構と考えられる土坑が伴うことを考えると、かなりシンボリック的な性格が考えられよう。(家塚・牧本)

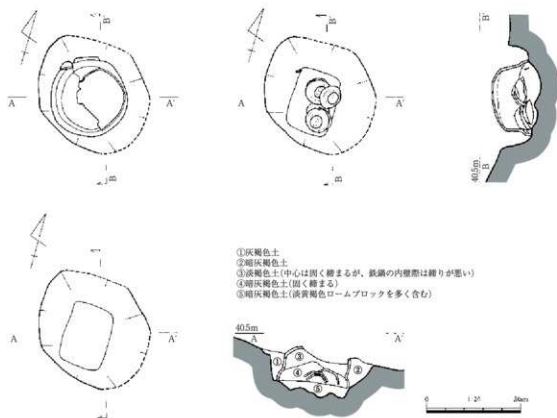
(2) 土坑

土坑 10 (第 248 図・249 図、P L 62・63・71)

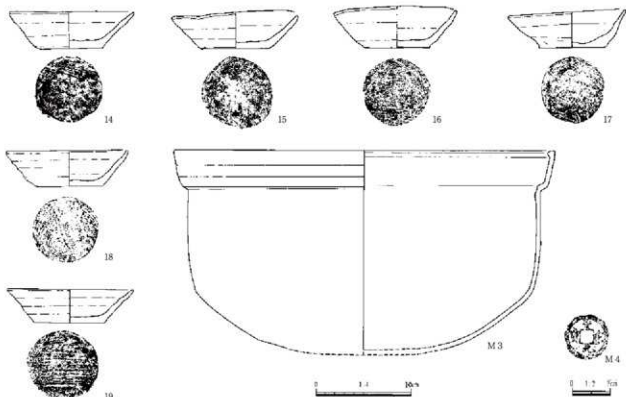
標高約 403m の調査区東側斜面部 C 3 グリッドにあり、盛土遺構 1 の盛土を除去し、旧表土面を検出しているときに、鉄鍋の破片が出土したことで存在を確認した。南東側約 1m には段状遺構 6 がある。

土坑は旧表土上面から掘りこまれ、底面でローム層に達する。掘形は直径 50cm の円形に復元され、検出面からの深さは 25cm、底面は 32cm × 22cm の南北に長い長方形を呈している。この底面はいびつであったためか、くぼみを埋めて均している。

土坑の中に鉄鍋 M 3 が伏せた状態で置かれ、その内側に 6 点の坏と 1 点の銅銭が入っていた。鉄鍋は口径 40cm、高さ 20cm で、口縁を下に向けていたが、土坑の底面よりも鍋の径が大きいために、土坑壁面に口縁を掛け、すこし傾いた状態であった。鍋底は検出時には破損しており、鍋内部の土は



第 248 図 土坑 10



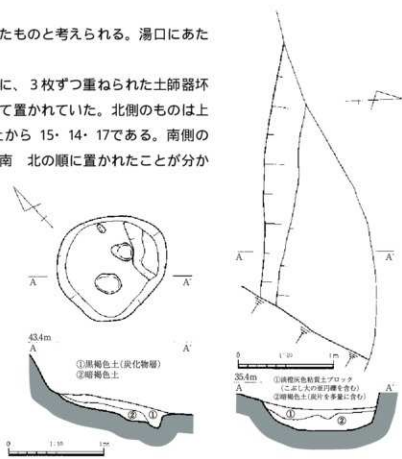
第24図 土坑10出土遺物

破面から少しずつ流入して堆積したものと考えられる。湯口にあたる部分は認められない。

伏せられた鉄鍋内部の底面中央に、3枚ずつ重ねられた土師器坏が2組、南北に隣り合わせに伏せて置かれていた。北側のものは上から 18・16・19 南側のものは上から 15・14・17である。南側の坏に北側の坏が重なることから、南北の順に置かれたことが分かる。銅銭は土坑底面の北西隅に、坏の置かれた面とほぼ同じ高さで、表面を内側にして、内側に少し傾きつつも立った状態で出土している。

土坑埋土は、旧表土と同質である。鉄鍋の出土状況から、埋め戻されたものと推測する。

出土遺物は、鉄鍋M3、土師器坏 14～19 聖宋元寶M4である。これらの遺物は、八峠編年中世期、13世紀～14世紀ごろのものと考えられ、出土位



第25a図 土坑6

第25b図 土坑11

置及び形態から盛土遺構 1 に伴う地鎮遺構と考える。(家塚)

土坑 6 (第 250 図、P L 64)

調査区東側の E 4 グリッドにあり、標高 426~433m の丘陵斜面部に立地する。下層には段状遺構 2 があるが、伴うものではない。

平面不整形円形を呈し、長軸 12m、短軸 108m、深さ 0.14m を測る。底面は傾斜しており、東側は段状となる。

埋土は、2層に分層できた。第 1 層は、炭化物を多量に含んでいる。埋土中で地山自然礫が 3 個出土している。

出土遺物はなく、時期、性格とも不明であるが、周辺にある製炭土坑の可能性ある。(牧本)

土坑 11 (第 251 図、P L 64)

調査区北側の B 4 グリッドにあり、標高約 382m の東側斜面部に立地する。段状遺構 1 の盛土直下で検出した。

北東側は検出作業の過程で消滅し、南西側は調査区外に延びるため、全容は明らかでないが、幅約 1m の帯状の掘り込みが地面の傾きに対して直交する向きに延びていたと考えられる。検出面からの深さは 15m、検出した全長は 25m で、断面は緩い船底形を呈する。

埋土は 2層に分かれ、下層は炭片を多量に含み、上層はロームブロックと垂円礫で構成される。炭焼きに使われ、その後埋め戻されたものと推測する。

出土遺物には、須恵器片があるが図化できなかった。段状遺構 1 盛土下層で検出されたことから、16世紀以前のものと考えられる。(家塚)

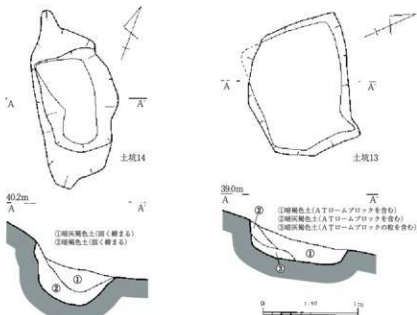
土坑 13 (第 252 図、P L 64)

調査区東側の C 3 グリッドにあり、標高約 382~387m の北東向きの斜面に立地する。

ローム層の上面で検出した。平面は不整形な五角形で、長軸 14m、短軸 1m、深さ 45m を測り、底面の形状は平坦である。

埋土はローム上面に堆積した、盛土遺構 1 形成前の旧表土に類似する。

出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、盛土遺構 1 (13~14世紀)以前と考えられる。性格、用途は明らかではない。(家塚)



第 252 図 土坑 13・14

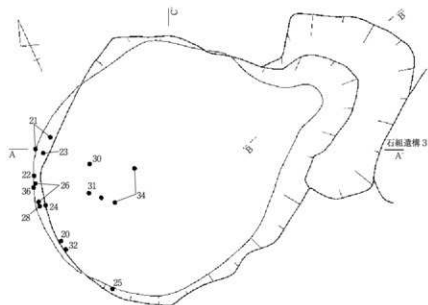
土坑 14(第 252 図、P L 64)

調査区東側の C 3 グリッドにあり、標高 393~396m の北東側に傾斜する斜面部に立地する。盛土遺構 1 の層序確認のために設定したサブトレンチによって存在を確認した。

掘り込み面は盛土遺構 1 の下の旧表土面よりも下になる。平面は不整形な長円形を呈し、長軸 16m、短軸 0.85m、深さ 30cm を測る。

埋土は 2 層に分層できた。いずれも固く締るものである。

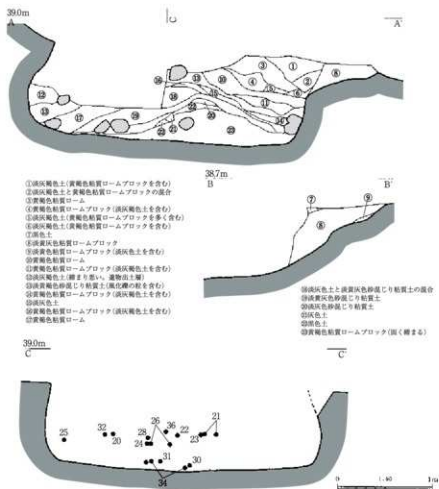
出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、層位的には段状遺構 6 (11 世紀ごろ) かそれ以前と考えられる。性格は不明であるが、風倒木痕の可能性もある。(家塚)



土坑 15 第 253・254 図、P L 64・72・73)

調査区東側の C 2、C 3、D 2、D 3 グリッドの交点に位置する。検出面の標高は 387m である。整地層をすべてはがした段階で検出したが、実際には整地層の上面から掘り込まれ、天井部の崩落した地下式横穴と考えられる。

平面形は長径 30m、短径 27m のほぼ円形であり、検出面からの深さは約 1m で、底面は平坦である。地山の削り出しによって東側に幅 1m、長さ 1m の斜面が作られる。入り口と見られるが階段等の加工はない。壁



第 253 図 土坑 15

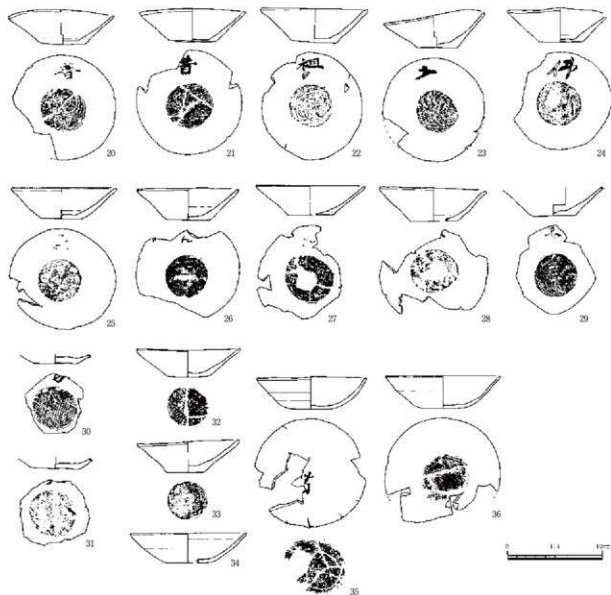
面は上がすばまるフラスコ状を呈している。

埋土は地山にとてもよく似ており、土層断面は中心が高くなる山型を呈している。上面を覆う造成土に由来するもので、土坑の天井部の崩落とともに埋没したものと考えられる。土坑の底面部および壁面まわりの埋土中から直径 20cm 大の礫がたくさん出土しているが、これらは造成土に含まれていたものが、天井の崩落とともに転落したと考えられる。

入り口部の対面に当たる西側の底面および壁際の埋土中より、多量の土師器杯が出土した。多くは上向きで出土しており、体部側面及び底面に墨書されているものがある。壁際のもは底面から約 20cm の高さでそろって出土していることから、土坑内の埋没の途中で持ち込まれたものと推定する。

図化したものは、土師器杯 18 点で、そのうち墨書が確認されたものは 13 点である。墨書には、「普」3 点（20・21・29）、「土」1 点（23）、「佛」1 点（24）、「祖」1 点（22）、「率？」1 点（35）、不明 6 点（25～28・30・31）である。

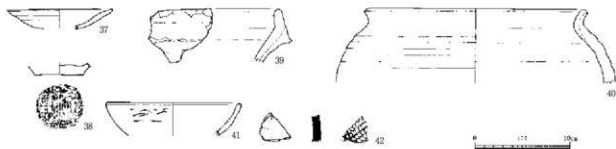
出土遺物から、中森分類により 15 世紀ごろのものと考えられる。土坑の入り口の埋土は石組遺構



第 25 図 土坑 15 出土遺物

3によって掘削されており、土坑 15 石組遺構 3の順に作られていることがわかる。これは、遺物による遺構の年代観からも矛盾しない。

形態的には、県西部によく見られる地下式横穴に似ているが、埋葬施設としてのものではなく、貯蔵用のものと理解したほうがよいと思われる。(家塚)



第25図 段状遺構1・2出土遺物

(3) 段状遺構

段状遺構1・2 (第255・256図、P L 65・66)

段状遺構1・2とも、調査区東側丘陵斜面部にあり、段状遺構1は標高約393m、段状遺構2は標高約425mに立地する。南側には、盛土遺構1が接している。

段状遺構1は、北東側の斜面を大きく切り崩し、その際に生じた土砂を下手側に盛り、平坦面を形成している。東端は盛土遺構1の造成土を掘削している。検出した長さは約20m、幅約5mで、法尻に沿って幅30m～70m、深さ20mの溝が掘削されている。

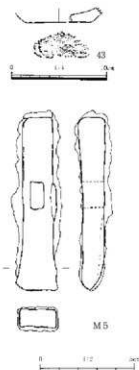
段状遺構2は、北東側の斜面の段状遺構1よりも上手側を切り崩し、土砂を下手側に盛り上げて平坦面を形成する。その規模は段状遺構1に比べて小さく、検出した長さは15m、幅2m。西側は調査区外になり、東側は盛土遺構1の上面につながる。法尻際に長さ4mに亘って、幅30m、深さ5mの溝を検出した。

出土遺物には、段状遺構1盛土中からの土師器皿37、備前焼播鉢39、土師器坏38、青磁碗41、表土中からの備前焼小型甕40、段状遺構2盛土最下層からの須恵器残片42を図化した。39はB2類、41は青磁碗C類に分類できる。

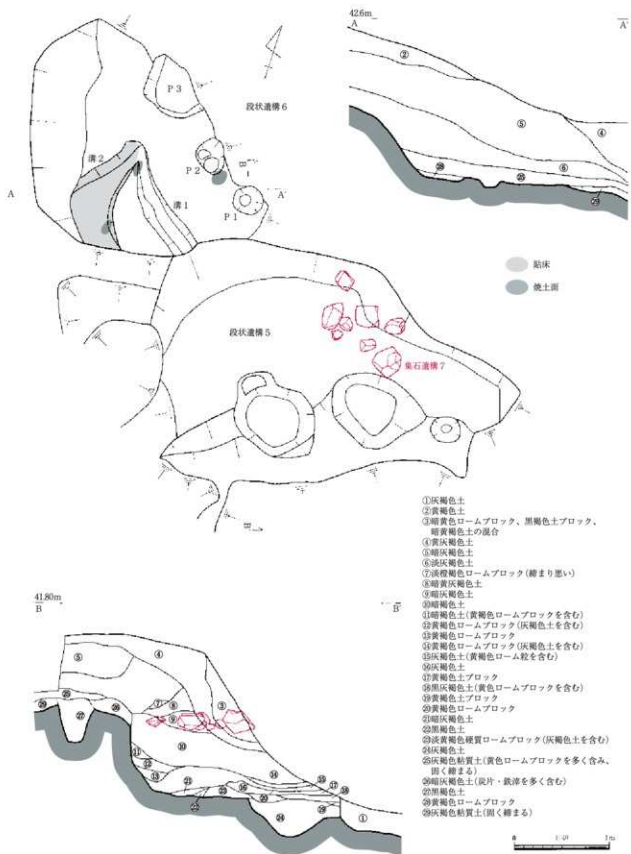
これらの遺物から、段状遺構1・2は15世紀後半から16世紀ごろに構築されたものと考えられる。性格は不明であるが、丘陵頂部の土壘・堀切等と時期的にも同時期であり、門前上屋敷遺跡の造成土上の建物と関連があるものと考えられる。(家塚)

段状遺構5 (第257・258図、P L 66・76)

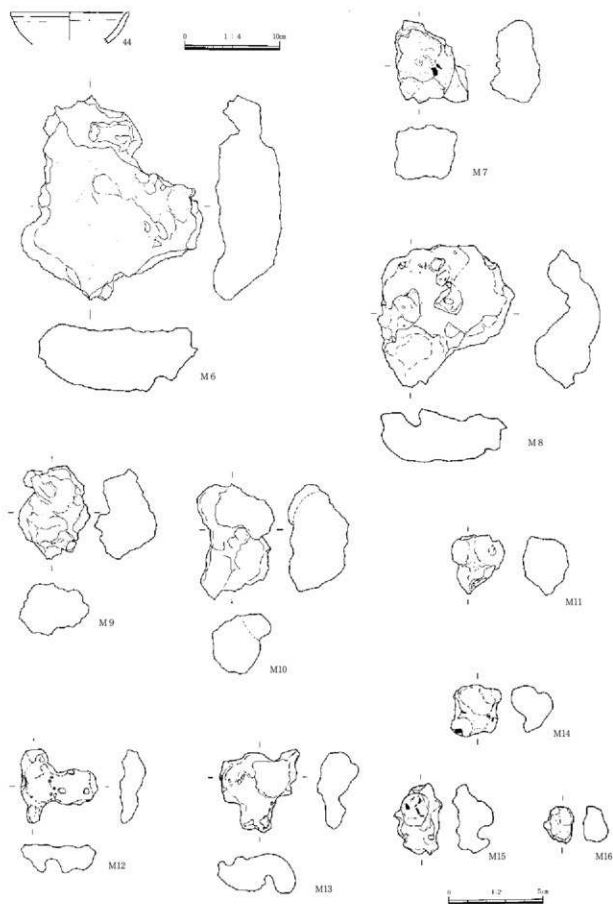
調査区東側のC3グリッドにあり、標高394～405mの斜面部に立地している。段状遺構6の南東側の床面および埋土を掘削した、テラス



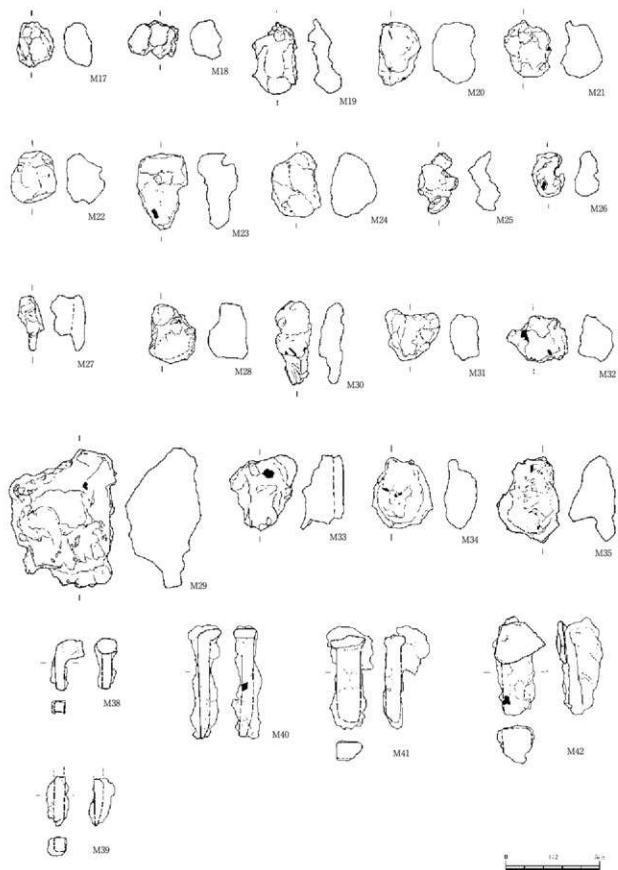
第26図 段状遺構5出土遺物



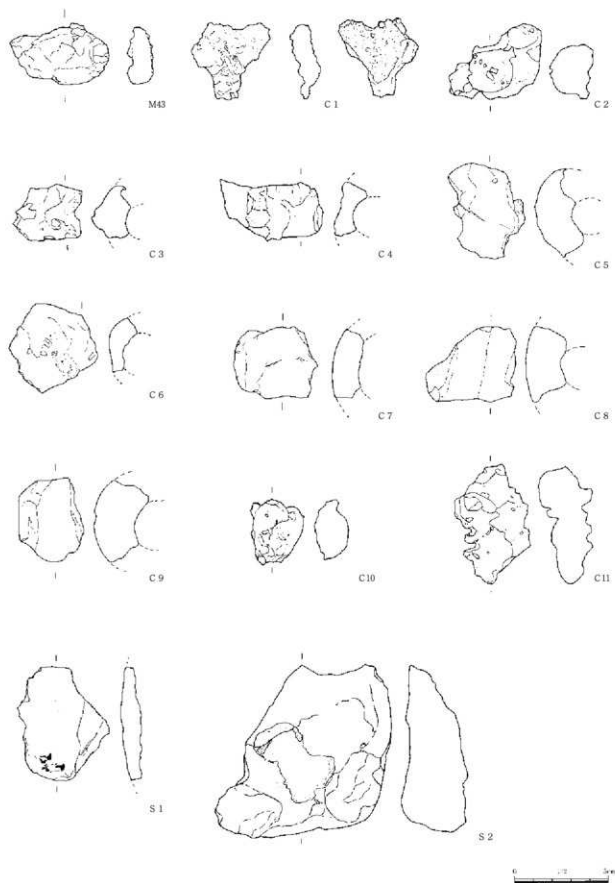
第258図 段状遺構5・6、集石遺構7



第259図 段状遺構6出土遺物



第26図 段状遺構6出土遺物



第26図 段状遺構6出土遺物

状の遺構である。

底面の幅 35m、奥行き 11m、検出面からの深さは 0.8mである。底面には径 50cmの土坑が存在するが、底面から約 10mまでの土の堆積はロームブロックとクロボクが互層をなす整地層によって埋め戻されている。

埋土中から、土師器埴底部 43 小型の鉄鍬M 5 が出土したが、これらは段状遺構 6 の埋土から流れ込んだものと推測する。

底面で検出した土坑は、周辺の状況を鑑みて、この遺構掘削以前の土取りのために掘られたものと考えられる。また、この遺構自体も土取りのために掘削された可能性がある。(家塚)

段状遺構 6 (第 258～261図、P L 66・76)

調査区東側の C 3 グリッドにあり、標高 40.2～41.2mの斜面部に立地している。

北東側に下る約 20度の斜面を掘削して段を形成している。床面の奥行きは最大で約 15m、幅は 26m残存する。南側は段状遺構 5 や土取りなどの後世の掘削によって破壊されている。

床面では 2 条の溝 (溝 1・2) と 3 基のピット (P 1・P 2・P 3) を検出した。溝 1 は床面の中央に位置する。北東 - 南西方向に伸び、北東端は溝 2 の端部と接し、南西端は段状遺構 5 によって切られる。長さ 12m、幅 29m、深さ 9cmである。溝 2 は南側の壁面際から北へ向かって伸び、溝 1 と接する端部に向かって窄まる。長さ 12m、最大幅 50cm、深さ 5cmである。溝 2 は床面を構成する地山と同質のロームを使って、床面の高さまで埋め戻されている。

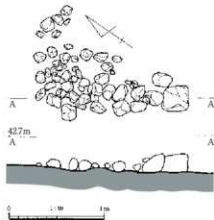
P 1 は径 32cm、深さ 45cm、P 2 は径 33cm、深さ 50cmである。これらに対し P 3 は径 70cm、深さ 18cm と皿状を呈しており、様相が異なる。埋土は P 1 が黒褐色土、P 2・3 が暗灰褐色土である。P 2 埋土中には鞆羽口片が含まれていた。

遺構埋土は、床面から 10～20cm 上が固くしまる。焼土面を 3箇所で検出したが、それらはいずれも遺構の床面よりも 5cm程度浮いた位置にあった。床面近くの埋土には多くの鉄滓・炭片が含まれている。特に P 1・P 2 周辺と溝 2 (埋め戻し後) 付近に集中している。焼土面が近いという共通性がある。

出土遺物には、図化できたものに土師器埴 44 椀形鍛冶滓 M 6～13 鍛冶滓 M 14～29 再結合滓 M 30～35 釘 M 38・40 棒状不明品 M 39・42 小形鋳 M 41 板状不明品 M 43 炉壁片 C 1・2、羽口片 C 3～9、粘土質溶解物 C 10・11 金床石片 S 1・2 がある。その他、埋土中から粒状滓 (M 36) 1317g、鍛造剥片 (M 37) 21082g を検出した。

小鍛冶で生成される遺物が出土していることになり、この遺構で小鍛冶が行われていたものと考えられる。上屋等に関わる遺構は検出することができなかった。

また、椀形鍛冶滓に含まれていた炭化物 2 点の年代測定を行った結果、950 ± 40BP、1100 ± 40BP の値が得られ、およそ 9～12 世紀代の年代と判定された。(家塚・牧本)



第 26 図 集石遺構 1

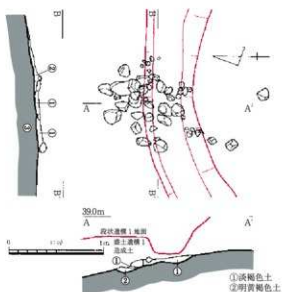
(4) 集石遺構

集石遺構 1 (第 262 図、P L 66)

調査区中央北側、D 4 グリッドの標高約 423m の丘陵東側中腹の平坦面に立地する。下層には、段状遺構 2 があるが、伴うものではない。

拳大から人頭大の山石が、遺存状態は悪いが長軸 165m、短軸 12m の範囲に長方形に並べられている。重なった状況は見られない。本来一段であったものなのかは、周辺がかなり削平を受けているものと思われ不明である。石材の下部には、土坑などの付属遺構は認められなかった。

出土遺物はなく、時期、性格とも不明であるが、層位的に判断すると、段状遺構 2 (16 世紀) 以降のものである。(牧本)



第 263 図 集石遺構 5

集石遺構 5 (第 263 図、P L 67)

調査区東側の C 3 グリッドにあり、標高 384~385m の斜面部に立地する。

盛土遺構 1 の造成土掘り下げ中に検出した。径 5~20cm の垂円礫が、径 1m の範囲にまいて出土した。礫は相互に重なり合う箇所もあるが、積み上げを意図したようなものではなく、面的な広がりを示す。

礫は盛土遺構 1 の盛土最下層に包含され、旧表土上面よりもやや上に位置する。このため、盛土遺構 1 に伴うものと考えられる。礫およびその周辺においても被熱等の痕跡は認められない。

出土遺物等はなく、性格は不明である。(家塚)

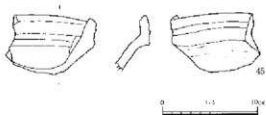
集石遺構 7 (第 258 図、P L 67)

調査区東側の C 3 グリッドにあり、標高 405m の斜面部に立地する。

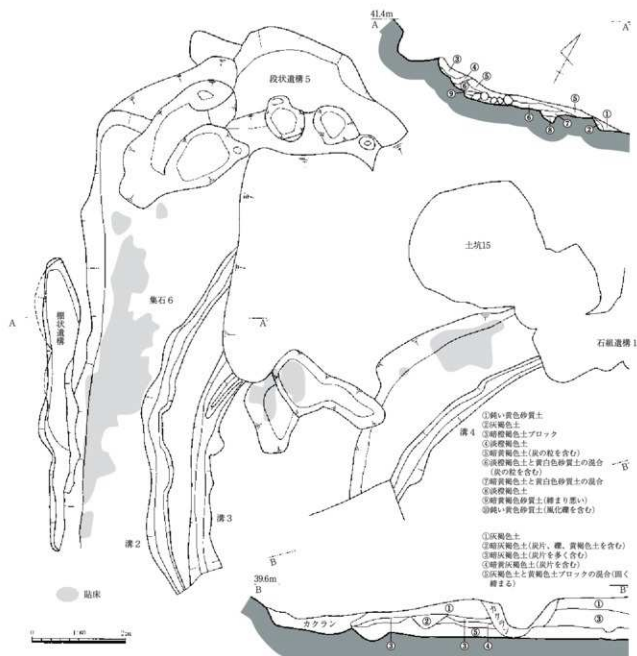
段状遺構 5 の埋土最上層 (第 257 図 B-B 10 層) 上面を遺構検出面とし、盛土遺構 1 の造成土を埋土とする。径 10~30cm の垂角礫が径 1m の範囲内からまいて出土した。中心に五輪塔の地輪のような形をした礫が配されていることから、埋葬施設の可能性を考えたが、その下から遺構を検出することはできなかった。北西側に 2m 離れた地点で土坑 10 を検出しているが、両者の検出面の標高がほぼ同じ高さ (405m) であることから、同時期に存在した可能性が考えられる。(家塚)

集石遺構 6、溝 2・3・4、櫛状遺構 (第 264~266 図、P L 67・74)

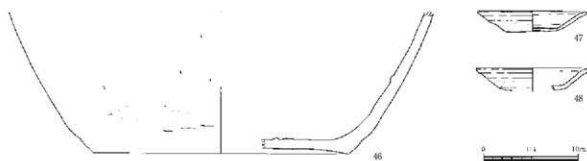
調査区東側の D 2・3 グリッドにあり、標高 393~405m の平坦面から斜面部にかけて立地している。D 2・3 グリッド平坦面は、炭化物混じりの層によって整地されており、これらの遺構は整地土除去後に検



第 264 図 溝 3 出土遺物



第265図 集石遺構6、溝2～4、棚状遺構



第266図 D3グリッド整地土内出土遺物

出することができた。

溝2は、幅24～57m、深さ11～49cmを測るもので、断面U字状を呈す。南側は調査区外へ延び、北側は後世の攪乱によって掘削されている。検出した範囲では、長さ76mに亘る。やや湾曲しておよそ南北方向に走る。

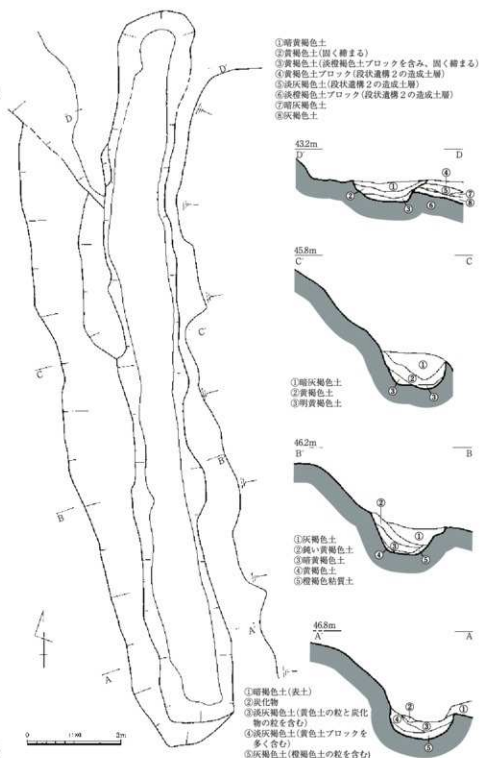
溝3は、溝2に平行するように走るもので、北側は二股に分かれる。幅38～66cm、深さ12cm程度を測り、断面U字状を呈す。同じく南側は調査区外へ延び、北側は後世の攪乱によって掘削されている。

溝4は、溝2・3の東側約2m東側にあり、これらに平行するように湾曲して走るもので、幅36～58cm、深さ5cm程度と浅い。断面U

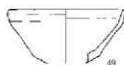
字状を呈す。南側は調査区外へ延び、北側は石組遺構3により切られている。

集石遺構6は、丘陵裾部を大きくテラス状に掘削し後に人頭大の自然礫が、長さ約7m、幅最大12mの範囲に、乱雑に置かれたものである。

櫓状遺構は、集石遺構6の西側に立つ崖面の中腹をえぐり込み、全長62m、奥行き02～07m、最大高約1mの櫓状に整形しているものである。底面の標高は406m前後であり、集石遺構6の上面よりも約07m上方に位置する。



第26図 溝1



第28図 溝1出土遺物

埋土の断面の記録はおこなっていないが、崖面と同質の土であり、崖面の風化によって自然に埋没したものと考えられる。遺物は出土していない。

出土遺物には、溝3からの備前焼播鉢 45を図化した。また、整地土中から備前焼甕 46 京都系土師器皿 47・48が出土している。

出土遺物から、45は備前 A期に当り、16世紀中ごろのものと考えられる。整地土中のもものも、16世紀ごろのものであることから、丘陵裾部を大きく加工し、溝等が作られた後ほどなく整地されたものと考えられる。それぞれの遺構の性格は不明である。(牧本)

(5) 溝

溝1 (第267・268図、P L 67・70)

調査区東側のC 4～E 4グリッド東端にあり、標高 42.2m～46.3mの斜面部に位置する。調査前は丘陵頂上へ続く小道であった。東側は崖となり、崖下の平坦面には石組遺構 1～3や土坑 15などの遺構群が立地する。

溝の断面は逆台形で、全長は 15m、上幅が 14～15m、下幅が 0.7～1m、深さは 0.5～1m。溝底は北側から南側へ上る傾斜となっていて、その高低差は 2.8mである。溝底の形状はなめらかであり、階段のような加工は施されていない。溝の両端は閉じている。検出面からの深さは北側から南側に行くに従って深くなる。

埋土は自然堆積と考えられ、掘り直しは認められない。

溝底から瀬戸天目茶碗 49の破片が出土した。

出土遺物から、16世紀ごろのものと考えられる。溝の北端が段状遺構 2の盛土を掘削していることから、溝 1は段状遺構 2の形成後に作られたものである。

遺構の立地と形状及び土壘・堀切と同時期であることから、砦に係する横堀のような性格が考えられる。(家塚)

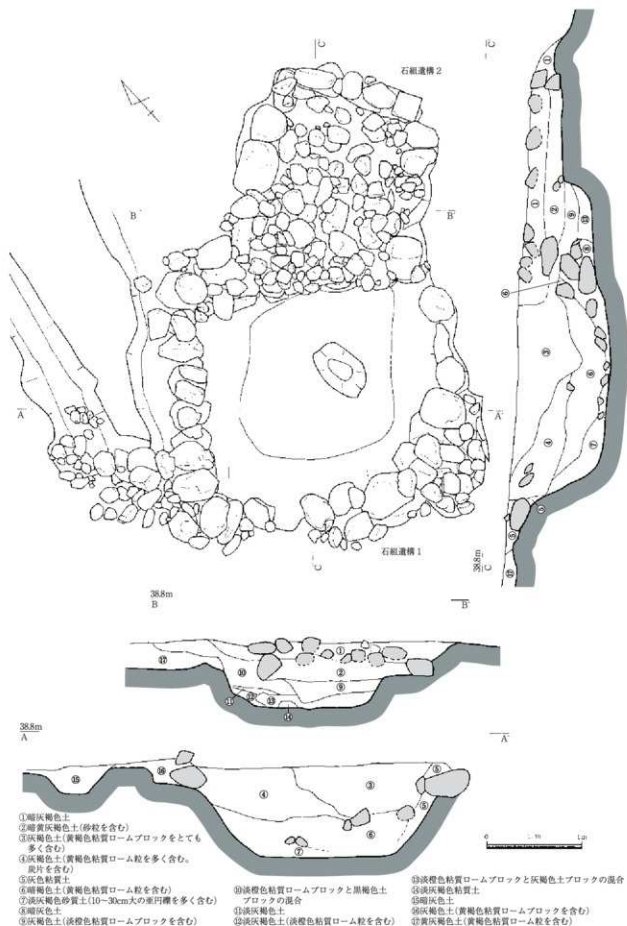
6) 石組遺構 1・2・3、土坑 16、溝 5 (第269～273図、P L 67・68・74)

調査区東側のC 2・D 2グリッド、標高 37.5m前後の整地された平坦部に立地する。

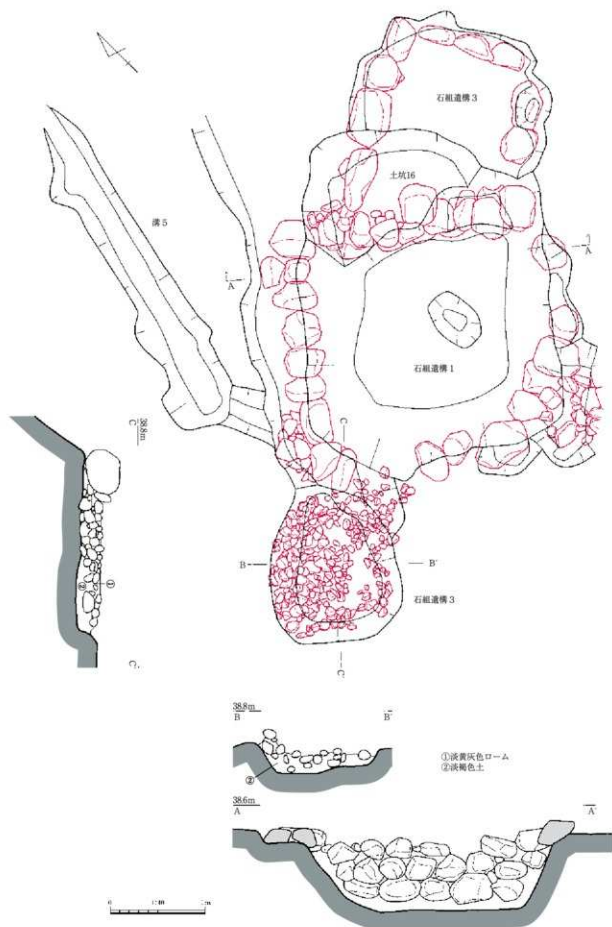
石組遺構 1は、整地層の上から掘り込まれた、一辺約 2.7m、深さ約 1mの隅丸方形の土坑の外縁に、30～60cm大の礫を2段積みになっている。石組の外周は、3.2～3.0mの方形を呈し、北東-南西方向に長軸をとる。石組の基底石はローム土を使って根固めが施される。土坑底面は 1.8～1.5mの隅丸方形である。土坑の四壁のうち、北東側の面のみ 3段の石積みが施されている。この部分は先行する土坑 16と切りあう箇所当たる。土坑内には石積みの礫と同様の礫が多量に転落していたことから、当初の石積みは 3段以上あったものと推定される。土坑の南隅と西隅には石組の溝がつながっている。

出土遺物は、埋土中からの土師器鍋 50 土師器坏底部 51 備前焼播鉢 52 須恵器高台付盤 53 鉄釘 M 44を図化した。

石組遺構 1の西隅から北へ向かって延びる溝 5は、整地層上面で検出した。溝の幅は約 50cm、深さ約 30cmで、断面は逆台形を呈する。溝の底面の傾斜は北へ向かって下っていく。土坑埋土の最下層は粘性を帯び、砂を多く含むことから、土坑内への水の流れ込みが考えられる。南隅側の溝から土



第269図 石組遺構1・2

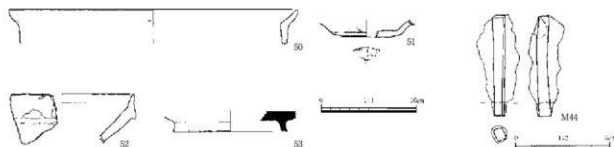


第27図 石組遺構1～3

坑内に水が流れ込み、あふれた水が溝5を通じて北へ導かれたものと推測され、石組遺構1は沈砂の役割をもつと考えられる。土坑内と南東側の溝はロームブロックを多く含む土によって埋め戻されている。

石組遺構2は、石組遺構1の北東辺で接し、柄鏡の柄状に北東側へ延びる。長軸は北東-南西を取るが、石組遺構1よりも東に振れ、一致しない。25×22m、深さ0.4mの方形の土坑の内周に沿って2段積みめの石組を持つ。東隅に当たる礫は五輪塔の地輪を転用したものである。南隅に当たる礫が石組遺構1を埋め戻した土の上面にあること、自然堆積と考えられる埋土の違いから、石組遺構2は1よりも後に作られたものとする。しかし南西辺側の石列は不明瞭であり、両方が一連の遺構であった可能性もある。

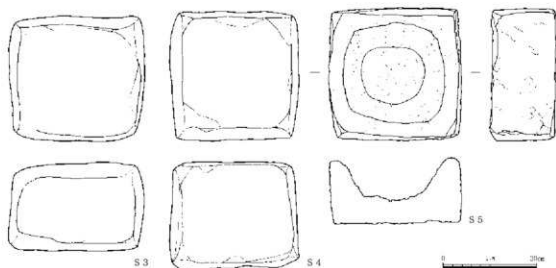
土坑の底面は平坦であり、土坑内には石組に使われるものよりも小振りの10cm～40cm大の礫が



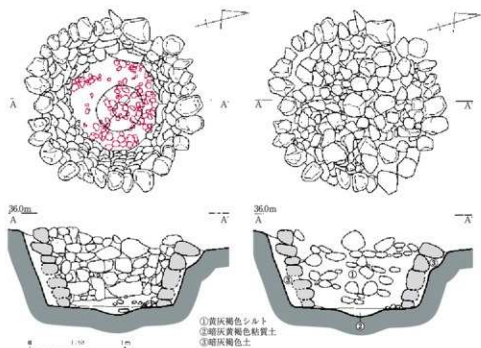
第271図 石組遺構1出土遺物



第272図 石組遺構2出土遺物



第273図 石組遺構2出土遺物

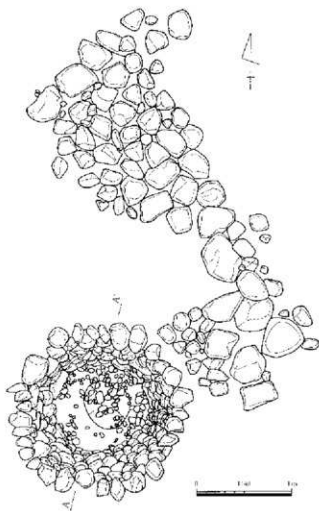


第274図 石組井戸

乱雑に入っている。これらの礫は石組に用いられていたものが転落したものと推測される。埋土中からは土師器皿 54～57が出土している。また、地輪 S 3～5を図化した。

石組遺構 3は、石組遺構 1の西隅に接する。径 13 16m、深さ約 0.3mの隅丸方形の土坑内に拳大の円礫を密に敷き詰めている。特に北西側の底面から壁面にかけての範囲に礫が多い。この礫の上に石組遺構 1の基底石が乗り、土坑は整地土で埋め戻されていることから、石組遺構 3は 1に先行するものと推測される。石組遺構 3は南西側で溝 4を、北西側で土坑 15を切ることから、それらよりも後出するものである。

土坑 16は、石組遺構 2の底面で埋土上面を検出した。石組遺構 1の北東側に土坑部分が 14m 拡幅したような形態をとる。検出面から底面までの深さは 0.4m であるが、石組遺構 1の土坑底面よりも約 0.2m 高い。土坑内の埋土は石組遺



第275図 石組井戸・石敷き遺構

構1の北東辺の石組設置に伴う、人為的なものである。

土坑底面に砂や粘土などの堆積が認められないことから、石組遺構1を設置する際に、設計変更などの理由により掘り過ぎた部分を埋め直し、壁面保護のために土坑底面から石組みを施したと推測する。

これらの遺構は、出土遺物から16世紀ごろのものと考えられる。(家塚)



第26図 石敷き遺構出土遺物

(7) 石組井戸・石敷き遺構(第274～276図、P L 69)

調査区東側のC2グリッドにあり、造成土除去後の暗灰褐色土を掘り下げた後に検出した。標高は485m前後である。

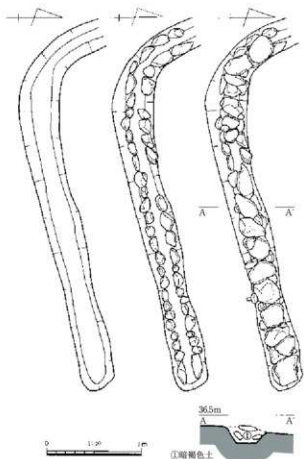
石組井戸は、地山自然礫を用いて築かれている。平面円形を呈し、検出面では長軸15m、短軸14m、底面では長軸096m、短軸09m、深さ08mを測る。石材は、上面に向かうほど傾斜し断面逆台形状を呈す。底面やや北東側は、約8cmに一段深くなっている。底面はやや皿状を呈し、径5cm前後の栗石が敷かれている。現状では、7段程度に積み上げられているが、本来は10段前後に積まれたものと考えられる。内部には、黄灰褐色シルト層とともに多量の石材が落ち込み、最下層には暗灰黄褐色粘質土が堆積している。

形態的には井戸としてよいが、水が湧いている状況は窺えず、単に貯水する性格の可能性もある。

石敷き遺構は、石組井戸の北東側に接し、逆L字状に人頭大の扁平な自然礫が敷かれていた。北側に向かって低く傾斜し、約15cmの高低差がある。

両遺構の位置関係から一体のものと考えられ、石敷き遺構は、石組井戸の通路として機能していた可能性がある。

石敷き遺構から砥石片S6が出土しているが、正確な時期は不明である。いずれも、層的には門前上屋敷遺跡14・15区造成土下で検出された田畠跡以前のものと考えられ、15世紀ごろのものと考えられる。(牧本)



第27図 石蓋暗渠

8) 石蓋暗渠(第27図、P L 69)

調査区東側、C2グリッドにあり、造成土除去後黒褐色土遺物包含層を除去中に、標高363m前後の斜面地テラス上面で検出された。門前上屋敷遺跡15区から延びる石垣状の集石1の下場付近に

隣接している。東側約 25m に石組井戸がある。

ほぼ東西に走るが、北西側は逆L字状に折れ、流失している。幅 0.3~0.45m、深さ 0.15m 前後の溝内に、拳大前後の自然礫を側壁に沿わせて並べ、その上に扁平な人頭大前後の石材を蓋石として被せている。長さは 41m 以上にわたる。底面はほぼ平坦である。溝埋土は、暗褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、層位的に造成以前の中世後期ごろのものと考えられ、石組井戸の導水施設の可能性がある。(牧本)

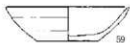


第 279 図 P 8 出土遺物

(9) 道状遺構 (第 278 図)

調査区東側の C 3・4 グリッドにあり、標高 388~424m の北東側へ傾斜する斜面部に立地する。盛土遺構 1 と段状遺構 2 の盛土の下層で検出した。

斜面を段状に削り、礫と土で路面を造

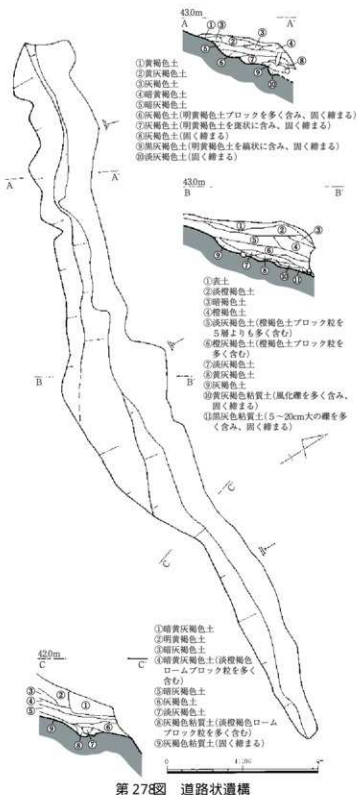


第 280 図 造成土中出土遺物

成したもので、東側から西側へ向かう、高低差 3m の上り坂道である。検出し

た長さは約 20m、道幅は 1~15m である。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、層位的に判断すると、9~12世紀の段状遺構 6 に関連する可能性がある。(家塚・牧本)

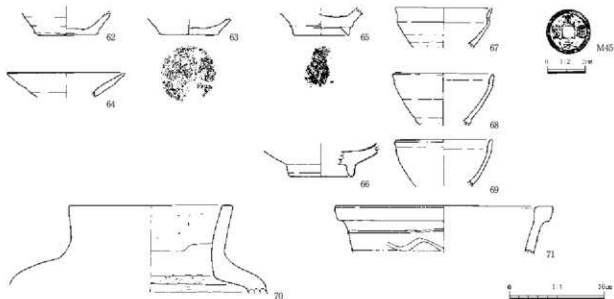


第 278 図 道路状遺構

(10) ビット群 (第 219・279 図)

調査区東側の C 2 グリッドにあり、標高 377～38m の斜面部に位置する。黒褐色土包含層を除去下後にローム層上で散在した計 9 個のビットを検出した。本来は、包含層中から掘り込まれたものである。

P 8 内で備前焼 58 が出土している。性格は不明であるが、出土遺物から、中世ごろのものと考えられる。(牧本)



第 28 図 造成土上面遺構外出土遺物

11) 造成土出土遺物 (第 28 図、P L 75)

当遺跡東側から門前上屋敷遺跡 15 区にかけて、大規模な造成が行われていることは、すでに述べたが、当遺跡側でこの造成盛土中で土師器及び須恵器を検出した。土師器 59 は、伏せた状態でほぼ完存している。土師器 60 須恵器高台付 61 は、サブレンヂで確認中に検出している。

51 は、平安時代ごろのもので、混入したものと思われるが、59・60 は、中森分類によれば 15 世紀ごろのものと考えられ、この造成が行われた時期を示すものと考えられる。(牧本)

(12) 造成土上面出土遺物 (第 281 図)

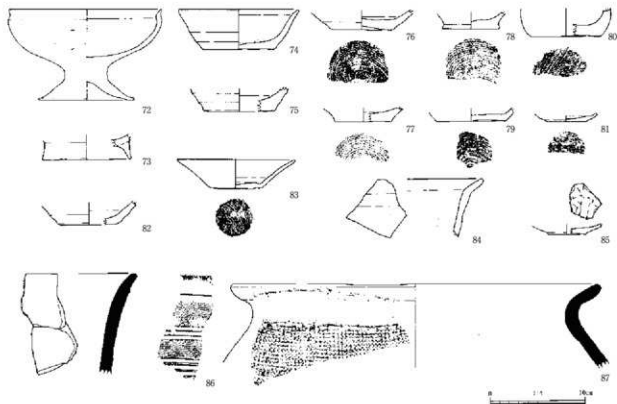
門前上屋敷遺跡に延びる造成土上面は、現代まで宅地として利用されており改変が著しい状態であったが、門前鎮守山城跡側での検出作業中に出土した遺物について触れる。

図化したものには、土師器 62～64 土師器高台 65 青磁碗 66 瀬戸天目茶碗 67～69 瓦質土器壺 70 陶器鉢 71 寛永通寶 M45 である。M45 は 期古寛永銭である。

概ね中世後期 (16 世紀) から近世にかけてのものであり、すでに失われている造成土上で営まれたであろう遺構の存続期間を示しているものといえる。(牧本)

13) 造成土下包含層出土遺物 (第 282・283 図、P L 75)

厚さ約 15m 前後を測る造成土を除去した後に、さらに下層を掘り下げた段階で出土した遺物につ



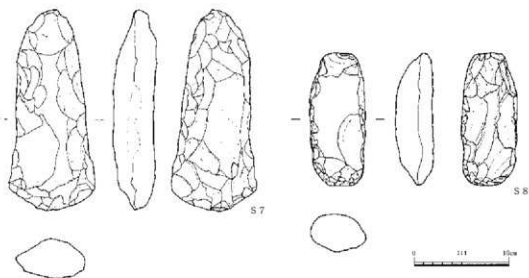
第28図 造成土下遺物包含層出土遺物

いて触れる。確実な遺構には伴ってはいないが、門前上屋敷遺跡で検出された田畠やそれ以前の遺構に属する遺物であろう。

図化したものは、短脚付碗 72 土師器高台付坏 73 土師器坏 74～83 土師器鍋 84 白磁皿 85 須恵器大型甕口縁部 86 須恵器甕 87 打製石斧 S 7・8 である。72は、古墳時代中期ごろのものと考えられる。73・86は奈良時代ごろ、74・75は平安時代ごろ、76～84は15世紀ごろのものと考えられる。85は白磁皿 類にあたり、12世紀ごろのものと考えられる。打製石斧 S 7は、形態的には

弥生時代ごろのものと考えられようか。打製石斧 S 8は、厚味があり風化が進んでいることから、縄文時代に遡るものと考えられる。

(牧本)



第28図 造成土下包含層出土遺物

第5節 遺物観察表

表33 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(1)

陣図	遺物番号	遺構・地区・層位名	種類	器種	材質	法量 (cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第22図	1	土器 鎮土中	須恵器	壺	磁胎	49 底径120	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰色	
第22図	2	堀切	土師器	埴	磁胎	29	内外面ともナデ。	やや粗(ほ 大の砂粒含む)	良好	内外面とも黄褐色	
第22図	3	堀切	土師器	埴	磁胎	14	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも淡黄褐色	
第23図	4	土坑7	縄文土器	鉢?	磁胎	39	内外面粗い赤褐色。		やや不良	内外面とも褐色	
第23図	5	土坑7	弥生土器	壺	磁胎	40	外面口縁部刻目。横筋赤褐色。横筋と胴部の間に交差。	やや粗(ほ 大の砂粒含む)	良好	内外面とも褐色	外面スス付着。
第23図	6	墓石2	陶器	皿	口径96 器高19 底径36	外面体部回転ナデ。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも褐色		
第24図	7	段状遺構3 底面	土師器	羽釜	口径214 器高26	外面ヨコナデ。内面刻筋のため調整不規。	密	良好	内外面とも褐色	外面スス付着。	
第24図	M1	段状遺構3 底面	古銭	元祐通寶	径25 厚さ0.13						
第24図	8	段状遺構4 埋土中	土師器	鍋	器高104	外面口縁部ヨコナデ。体部粗いクツハケ。内面後円部ヨコナデ。体部粗いクツハケ。	密	良好	内外面とも淡黄褐色	外面スス付着。	
第24図	9	段状遺構1	瓦葺土器	羽釜	口径216 器高42	外面口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも陶オリーブ灰色	外面スス付着。	
第24図	10	段状遺構1	備前焼	露鉢	器高73	外面ヨコナデ。内面ヨコナデ後粗い6条の横目。	密	良好	内外面とも明赤褐色	B-2 跡	
第24図	11	段状遺構1	土師器	埴	器高20 底径66	外面体部ナデ。底面回転糸切り。回転ナデ。	密	良好	内外面とも褐色	底面一部黒褐色	
第24図	12	段状遺構1	土師器	火鉢?	器高20	外面二段に三角形スタンプ文。内面粗いハケ。	密	良好	内外面ともに赤い褐色		
第24図	13	段状遺構下 及埋土土柱 倉庫C3	東洋焼	甕	器高98	外面平行叩き後ナデ。蓋所付ちゆき文葉に刻文。内面粗いナデ。	密	良好	外面に赤い赤褐色。内面に赤い褐色		
第24図	14	土坑10	土師器	埴	口径130 器高40 底径61	外面体部ヨコナデ。底面回転糸切り後横目。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面に赤い黄褐色。内面に淡黄褐色。内面明黄褐色。内面一淡黄褐色	外面底面黒褐色	
第24図	15	土坑10	土師器	埴	口径132 器高40 底径71	外面体部ヨコナデ。底面回転糸切り後ナデ。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面に赤い黄褐色。内面に赤い黄褐色。内面一淡黄褐色	体部外面爪痕	
第24図	16	土坑10	土師器	埴	口径128 器高455 底径695	外面体部ヨコナデ。底面回転糸切り後横目。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面に赤い黄褐色。内面に赤い黄褐色。内面一淡黄褐色		
第24図	17	土坑10	土師器	埴	口径130 器高40 底径61	外面体部ヨコナデ。底面回転糸切り。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面に赤い黄褐色。内面に淡黄褐色。内面明黄褐色。内面一淡黄褐色	体部外面爪痕	
第24図	18	土坑10	土師器	埴	口径127 器高38 底径70	外面体部ヨコナデ。底面回転糸切り後ナデ。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面黄褐色。内面に赤い黄褐色。内面に赤い黄褐色		
第24図	19	土坑10	土師器	埴	口径132 器高355 底径74	外面体部ヨコナデ。底面回転糸切り後横目。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面に赤い黄褐色。内面に赤い黄褐色。内面に赤い黄褐色。内面一淡黄褐色		
第24図	M3	土坑10	銅鉄	鍋	口径40.2 器高216 底径356	受口口縁をもつ鉄製製鍋。体部から底部に別の鉄器が付着していたか。					溝口痕跡なし
第24図	M4	土坑10	古銭	聖元元寶	径24 厚0.15	裏面化著しい。					
第25図	20	土坑15	土師器	埴	口径111 器高37 底径48	外面体部回転ナデ。底面回転糸切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも淡黄褐色。内面一褐色	体部外面化著土地。体部外面黒褐色。黒褐色。	

表 34 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(2)

陣団	遺物番号	遺構・地区・層位名	種類	器種	材質	法量 (cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第25-60	21	土坑 15	土師器	埴		口径 111 器高 35 底径 5.0	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。内面回転ナズ。	密	やや不良	外面褐色。内面黄褐色。内面黄褐色一帯色。	体部外面化粧土施す。体部外面磨き「磨」。
第25-60	22	土坑 15	土師器	埴		口径 111 器高 37 底径 4.4	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。内面回転ナズ。	密	やや不良	外面褐色。内面黄褐色。	体部外面化粧土施す。体部外面磨き「磨」。
第25-60	23	土坑 15	土師器	埴		口径 106.5 器高 41.5 底径 4.3	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。内面回転ナズ。	密	やや不良	外面明褐色。内面浅黄褐色一帯色。	体部外面化粧土施す。体部外面磨き「磨」。
第25-60	24	土坑 15	土師器	埴		口径 10.3 器高 3.5 底径 4.4	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。内面回転ナズ。	密	不良	外面浅黄褐色一帯黄褐色。内面黄褐色。	体部外面化粧土施す。体部外面磨き「磨」。
第25-60	25	土坑 15	土師器	埴		口径 111 器高 32 底径 4.4	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。内面回転ナズ。	やや粗 (石灰・長石含む)	やや不良	内外面とも浅黄褐色。	体部外面化粧土施す。体部外面磨き。文字不明。
第25-60	26	土坑 15	土師器	埴		口径 108 器高 33 底径 4.6	外面体部ヨコナズ。底部回転糸切り。内面ヨコナズ仕上げナズ。	密	やや不良	内外面とも浅黄褐色。	体部外面化粧土施す。体部外面磨き。文字不明。
第25-60	27	土坑 15	土師器	埴		口径 114 器高 31.5 底径 4.9	内外面とも褐色化のため調整不明。外面底部回転糸切りナズ。	密	やや不良	外面浅黄褐色一帯色。内面黄褐色。	内外面化粧土施す。体部外面磨き。文字不明。
第25-60	28	土坑 15	土師器	埴		口径 112 器高 36 底径 4.6	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。内面体部回転ナズ。底部ヨコナズ。	密	やや不良	内外面とも黄褐色。	体部外面化粧土施す。体部外面磨き。文字不明。
第25-60	29	土坑 15	土師器	埴		器高 2.85 底径 4.6	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。内面回転ナズ。	密	やや不良	外面黄褐色一帯色。内面黄褐色。	体部外面化粧土施す。体部外面磨き「磨」。
第25-60	30	土坑 15	土師器	埴		器高 0.8 底径 4.5	外面体部回転ナズ。底部静止糸切り。内面回転ナズ。	密	やや不良	内外面とも褐色。	体部外面化粧土施す。体部外面磨き。文字不明。
第25-60	31	土坑 15	土師器	埴		器高 1.1 底径 4.7	外面体部ヨコナズ。底部静止糸切り。内面ヨコナズ仕上げナズ。	密	やや不良	外面浅黄褐色。内面黄褐色。	体部外面化粧土施す。体部外面磨き。文字不明。
第25-60	32	土坑 15	土師器	埴		口径 108 器高 31.5 底径 4.25	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。内面回転ナズ。	密	やや不良	内外面とも浅黄褐色。	体部外面化粧土施す。
第25-60	33	土坑 15	土師器	埴		口径 108 器高 34 底径 4.0	外面褐色化著しい。底部回転糸切り。内面黄褐色化著しい。	やや粗 (石灰・赤色砂含む)	やや不良	内外面とも浅黄褐色。	内外面化粧土施す。
第25-60	34	土坑 15	土師器	埴		口径 12.2 器高 3.1 底径 4.4	外面体部回転ナズ。底部糸切り。内面体部回転ナズ。底部ヨコナズ。	密	やや不良	内外面とも浅黄褐色。	体部外面化粧土施す。
第25-60	35	土坑 15	土師器	埴		口径 116 器高 34 底径 3.9	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。内面回転ナズ。	密	やや不良	外面浅黄褐色一帯色。内面黄褐色。	体部外面化粧土施す。体部外面磨き。文字不明「草」か。
第25-60	36	土坑 15	土師器	埴		口径 121 器高 34.5 底径 4.7	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。内面回転ナズ。	密	不良	内外面とも浅黄褐色一帯色。	体部外面化粧土施す。
第25-60	37	段状遺構1 段土上層	土師器	皿		口径 110 器高 2.1	内外面とも回転ナズ。	密	良好	内外面とも浅黄褐色。	
第25-60	38	段状遺構1 段土中	土師器	皿		器高 1.0 底径 5.0	外面底部回転糸切り後傾斜。内面調整不明。	密	やや不良	内外面とも褐色。	
第25-60	39	段状遺構1 段土中	備前焼	盛鉢		口径 32.6 器高 4.1	内外面ヨコナズ。	密	良好	外面褐色一帯に濃い褐色。内面褐色。	
第25-60	40	段状遺構1 表土中	備前焼	壺		口径 22.4 器高 7.8	内外面ヨコナズ。	密	良好	内外面とも濃い赤褐色。	
第25-60	41	段状遺構1 段土中	青磁	碗		口径 14.0 器高 3.5	外面口縁部付近彫刻化した波状の雷文をもち。	密	良好	灰白色。	内外面磨く施箱。青磁碗 C 類。
第25-60	42	段状遺構2 段土最下層	須恵器	椀		器高 3.0	外面格子印き。内面ハケ目。	密	良好	内外面とも灰色。	
第25-60	43	段状遺構5 埋土中	土師器	埴		器高 1.0 底径 7.0	外面体部調整不明。底部回転糸切り。内面ナズナ。	密	良好	内外面とも浅黄褐色。	
第25-60	44	段状遺構6 埋土中	土師器	埴		口径 12.4 器高 3.4	内外面とも回転ナズ。	密	良好	外面に濃い黄褐色。内面に濃い褐色。	外面又付着。
第26-60	45	溝 3	備前焼	盛鉢		器高 5.9	外面口縁部 2部彫刻。体部ヨコナズ。内面ヨコナズ。	密	良好	内外面とも暗赤褐色。	VA類

表 35 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(3)

探区	遺物番号	遺構・地区・層位名	種類	器種	材質	法量 (cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第26探区	46	D3 野地層	備前焼	甕		器高 150 底径 269	外面ハケ状工具による上方向ナズ。 内面ナズ。	密	良好	内外面ともに 濃い赤褐色	
第26探区	47	D3 野地層	土師器	皿		口径113 器高235 底径55	外面体部上半ヨコナズ。下半一底部クズ り後ナズ。 内面体部ナズ。底部ヨコナズ。	密	良好	内外面ともに 濃い黄褐色	体部内面工具痕 あり。内外面擦 押丸みあり。
第26探区	48	D3 野地層	土師器	皿		口径 118 器高 23 底径 68	外面上半ヨコナズ。下半一底部クズり後 ナズ。 内面体部ナズ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	内外面擦押丸 みあり
第26探区	49	溝1 最下層	瀬戸	天目茶碗		口径 120 器高 56	輪軸型形。	密	良好	灰白色	内外面鉄跡。
第27探区	50	石組遺構1	土師器	鍋		口径 304 器高 37	外面ナズ。器底部擦押丸み。 内面ヨコナズ。	密	良好	内外面ともに 濃い黄褐色	
第27探区	51	石組遺構1	土師器	坪		器高 14 底径 52	外面体部斜方向ハケ。底部回転糸切り。 内面回転ナズ。	密	良好	内外面ともに 濃い黄褐色	外面底部あり。
第27探区	52	石組遺構1	備前焼	磁鉢		口径 240 器高 52	外面回転ナズ。 内面回転ナズ後粗い凹凸。	密	良好	外面灰色。 内面オリーブ 灰色	B-2層
第27探区	53	石組遺構1	須恵器	高台付鍋		器高 21 底径 120	内外面とも回転ナズ。	密	良好	内外面とも灰 色	
第27探区	54	石組遺構2	土師器	皿		口径 126 器高 21 底径 59	外面口縁部ヨコナズ。体部下キタテハケ 後ナズ。 内面ヨコナズ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	
第27探区	55	石組遺構2	土師器	皿		口径 124 器高 21 底径 54	外面口縁部ヨコナズ。体部下半手摺ね 成り。 内面ヨコナズ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	
第27探区	56	石組遺構2	土師器	皿		口径 126 器高 24 底径 50	外面口縁部ヨコナズ。体部下半手摺ね 成り。 内面ヨコナズ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	
第27探区	57	石組遺構2	土師器	小皿		口径82 器高18 底径12	外面口縁部ヨコナズ。体部下半手摺ね 成り。 内面ヨコナズ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	口唇部油煙付 着。
第27探区	53	石組遺構2	五輪塔	地軸		最大長 271 最大幅 288 最大厚 188	方形に加工した五輪塔地軸。加工面は明 瞭ではない。				
第27探区	54	石組遺構2	五輪塔	地軸		最大長 271 最大幅 274 最大厚 228	方形に加工した五輪塔地軸。側面に幅18 cm程度のノミ痕が残る。				
第27探区	55	石組遺構2	五輪塔	地軸		最大長 282 最大幅 279 最大厚 135	中央が張り直められた五輪塔地軸。幅1- 2cm程度のノミ痕が明瞭に残る。				
第27探区	56	石製キ状遺 構	磁石	細粒花 崗岩		最大長 38 最大幅 45 最大厚 125	裏面。一方隅欠損。主な表面は粗。擦痕 明瞭に残る。				
第27探区	58	P8 埋土中	備前焼	甕		口径 170 器高 40	外面口縁部ナズ後 擦次線。 内面ヨコナズ。	密	良好	内外面ともに 濃い褐色	磨?
第28探区	59	造成土中 C1	土師器	坪		口径130 器高36 底径67	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。 内面回転ナズ。	密	不良	内外面とも橙 色	内面鉄器付着 痕。
第28探区	60	造成土中 C2	土師器	坪		器高36 底径55	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。 内面回転ナズ。	密	やや不良	内外面とも橙 色	糸切り線跡部 まで及ぶ。
第28探区	61	造成土中 C1トレン チ	須恵器	高台坪		器高 20 底径 70	内外面とも回転ナズ。	密	良好	内外面とも灰 色	
第28探区	62	遺構外 B4	土師器	坪		器高 24 底径 67	外面回転ナズ。底部へタ切り後ナズ。 内面回転ナズ。	密	良好	内外面ともに 濃い黄褐色	
第28探区	63	遺構外 C2	土師器	坪		器高 18 底径 62	外面風化著しい。回転ナズか。底部回転 糸切り。 内面風化著しい。回転ナズか。	密	やや不良	内外面とも浅 黄褐色	
第28探区	64	遺構外 石塔 裏込め土中	土師器	坪		口径 124 器高 36	内外面回転ナズ。	密	やや不良	内外面とも浅 黄褐色	
第28探区	65	C2 表土中	土師器	高台坪		器高 29 底径 57	外面体部回転ナズ。底部回転糸切り。 内面回転ナズか。	やや粗(3mm 以下の砂粒含 む)	良好	内外面とも橙 色	
第28探区	66	遺構外 C2 表土中	青磁	高台付鍋		器高 35 底径 66	内外面とも厚いオリーブ色の焼跡。底部 外面鉄跡。	密	良好	灰オリーブ	
第28探区	67	遺構外 C4	瀬戸	天目茶碗		口径 102 器高 42	内外面とも回転ナズ。	密	良好	灰オリーブ	内外面鉄跡。

表36 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(4)

序号	遺物番号	遺構・地区・埋蔵名	種類	器種	材質	法量 (cm)	平法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第28図	68	遺構外 C3 表土	瀬戸	天目茶碗	磁	口径 104 底径 55	内外面とも回転ナデ。外面体部施焼。底部付着痕跡。内面施焼。	密	良好	灰オリブ	内外面施焼。
第28図	69	遺構外 B3 表土中	瀬戸	天目茶碗	磁	口径 100 底径 50	内外面とも回転ナデ。外面体部上半施焼。下半無施。内面施焼。	密	良好	灰オリブ	内外面施焼。
第28図	70	遺構外 C1	瓦葺土器	短冊壺	磁	口径92 底径 171	外面ナデ。内面磨研さ丸。	密	良好	外面灰黄色。内面灰色。	
第28図	71	遺構外 C2	陶器	鉢	磁	口径 227 底径 127	外面回転ナデ。源凹縁部に波状凹線。内面ナデ。	密	良好	内外面ともに 灰黄褐色	
第28図	M45	遺構外 B2	古銭	寛永通寶		径240 厚さ012					磨
第28図	72	造成土下包 食器 B3	土師器	脚付埴	磁	口径 160 底径 96 底径 99	外面口縁部ヨコナデ。体部左方向ケズリ。脚部ケズリ後ナデ。内面体部丁寧なナデ。脚部ナデ。	密(3mm以下 砂粒含む)	良好	内外面とも 灰黄褐色	脚部指跡圧痕あり。
第28図	73	造成土下包 食器 C2	土師器	高台杯	磁	口径 26 底径 93	内外面とも回転ナデ。	やや粗(1m m大の砂粒含む)	良好	内外面ともに 灰黄褐色	底部内面スリ付着。
第28図	74	造成土下包 食器 C2	土師器	杯	磁	口径 124 底径 42 底径 74	外面風化著しい。ナデか。内面体部回転ナデ。底部ナデ。	密(3mm以下 砂粒含む)	やや不良	内外面とも 灰黄褐色	内面底部スリ付着。
第28図	75	造成土下包 食器 C2	土師器	杯	磁	口径 24 底径 64	外面体部回転ナデ。底部糸切りか。内面回転ナデ。	密	良好	内外面とも 褐色	
第28図	76	造成土下包 食器 B3 黒褐色土	土師器	杯	磁	口径 21 底径 65	外面体部ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密	良好	内外面ともに 灰黄褐色	
第28図	77	造成土下包 食器 C2	土師器	杯	磁	口径 16 底径 60	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面ナデ。	密	良好	内外面とも 灰黄褐色	
第28図	78	造成土下包 食器 B2	土師器	杯	磁	口径 18 底径 60	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面ナデ。	密	良好	内外面ともに 灰黄褐色	
第28図	79	造成土下包 食器 B3 トレンチ	土師器	杯	磁	口径 14 底径 73	外面体部ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密	良好	内外面ともに 灰黄褐色	
第28図	80	造成土下包 食器 B2	土師器	杯	磁	口径 30 底径 74	外面体部ナデ。底部静止糸切り。内面ナデ。	密	良好	内外面とも 褐色	
第28図	81	造成土下包 食器 B2	土師器	皿	磁	口径 09 底径 43	内外面風化著しい。底部外面回転糸切り。	密	良好	内外面ともに 灰黄褐色	
第28図	82	造成土下包 食器 B2	土師器	杯	磁	口径 24 底径 57	外面体部回転ナデ。底部ケズリ。内面丁寧なナデ。	密	やや不良	外面に灰黄褐色。内面暗赤褐色。	
第28図	83	造成土下包 食器 B2	土師器	杯	磁	口径 124 底径 35 底径 40	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部ヨコナデ。	密	良好	内外面ともに 灰黄褐色	
第28図	84	造成土下包 食器 B2	土師器	鍋	磁	口径 73	外面ナデ。内面ヨコハケ。	密	良好	外面に灰黄褐色。内面灰褐色。	外面スリ付着。
第28図	85	造成土下包 食器 C2	白磁	皿	磁	口径 12 底径 40	外面体部施焼。底部磨光。内面粗文。施焼。	密	良好	灰白色	白磁皿 磨
第28図	86	造成土下包 食器 B2	須恵器	甕	磁	口径 107	外面3箇所縁により削り出された鋭い突部等による器体の歪状。内面回転ナデ。	密	良好	内外面とも 黄灰色	
第28図	87	造成土下包 食器 B2	須恵器	甕	磁	口径 386 底径 88	外面口縁部ヨコナデ。体部格子状。内面口縁部ヨコナデ。体部粗いハケ。	密	良好	外面灰黄色。内面灰黄一筋赤褐色	
第28図	57	造成土下包 食器 C2	石器	打製石斧	安山岩	最大長 211 最大幅 90 最大厚 41 重量 952g	刃部磨削に広がる。極めて厚味のある打製石斧。				
第28図	58	造成土下包 食器 C2	石器	打製石斧	無瑕晶 安山岩	最大長 140 最大幅 59 最大厚 41 重量 504g	小形で厚味のある打製石斧。裏面は平坦だが、後面は縁辺部に調整が入るのみで丸みを持つ。				

なお、該当遺物観察表は、第6章第5節参照。